

あ の 時 き の “ち ょ っ と い い 話”、今 ま さ に 進 ん で い る “新 し い 取 り 組 み”。
北 海 道 医 療 大 学 が、こ れ か ら 未 来 へ 向 か う 姿 を 探 る た め に、
本 学 の 歩 み を “知 る 人”、“つ く る 人” に、お 話 を う か が っ て い け ま す。

育てたいのは、チーム医療の現場で活躍できる心理専門職です。

研究と臨床は、両輪。

2001年。医学部合格をめざし、浪人生活3年目に突入。心理学に興味はあったものの、文系のイメージが強い心理学系への進学など考えもしませんでした。そんな私の心を動かしたのが、新設となる本学心理科学部のパンフレット。「心を科学的に理解する」「医科学系も学ぶ」という内容に「これだ!」と思い、臨床心理学1期生となりました。

医学部に行った仲間たちに、負けたくない。そんな意欲があった私は、多くの知識と技術を得て卒業できるよう、がんばって勉強しました。アルバイト、サークル活動、海外旅行など、やりたいと思ったことは何でも実行しました。中でも、私の原点は、坂野雄二先生のゼミで研究のおもしろさを実感したこと、坂野先生の「Scientist & Practitioner (科学者実践家)」つまり、研究と臨床は両輪という姿勢に感銘を受けたことです。修士課程、博士課程と学びを深める中で、私も教育・研究・臨床のすべてに携わりたいという思いが明確になっていきました。

学部時代から関心があり、今も主な研究テーマとしているのは「痛み」です。慢性的な痛みの8割以上は、原因不明。解明されていないことが多い一方で、心理社会的要因が痛みに影響することはわかっています。私たち心理専門職が行うのは、認知行動療法に基づいたアプローチ。患者さん自身が痛みに関する事実を客観的に捉え、どうしたらよくなっていくかという展望を描けるよう支援します。心理的援助によって、痛みや生活が改善するケースも少なくありません。そして、身体と心の



本谷准教授(右から6番目)が代表幹事となり企画・運営を行った、心理科学部1期生の卒業謝恩会にて。金澤准教授(左から5番目)を含め、坂野ゼミの同期10名も全員一緒に写っている。同窓生の交流は、臨床・学術交流の場面や同窓会の活動などを通して現在も続いている。

両面から痛みに迫る最先端の研究・臨床現場が、福島県立医科大学。2010年から6年間、私が在籍していた職場です。

東日本大震災での経験。

福島県立医科大学では、教育・研究職として医学部生対象の科目などを担当しながら、痛みの研究にも取り組みました。また、附属病院や大学健康管理センターでの臨床活動も行っていました。そして、一生忘れられない経験も。東日本大震災です。

着任した2010年、私は本学大学院の博士課程3年目でした。私にとって最後の卒業式・修了式は、2011年3月11日。その前日、仙台空港から北海道へ向かいました。そして、式を終えた後のこと。福島にいる妻から「これから大きな地震がくるみたい」と電話があり、悲痛の声を聞きました。テレビでは、見覚えのある光景が。車を停めてきた仙台空港が、土砂にのみこまれていく様子でした。わずか一日違いで、命拾いました。福島に戻れたのは翌日深夜。家族は無事でした。後日、車も発見され、泥まみれのナンバープレートだけが戻ってきました。

家族との再会後、すぐに職場へと向かうと、想像以上の大混乱。附属病院には被災した患者さんが次々と到着し、スタッフ総動員でケアにあたりました。同時に、被害が大きい沿岸地域へ出向しての支援も開始。私も、そのチームに加わりました。

被災地では、職種や立場は関係ありません。避難している方々の話を聞いたり、爪を切ってあげたり、「家はどうしてくれるんだ」と怒鳴られることも多々ありました。心理専門職というより、ひとりの人間として、できることは何でもしました。そして、支援にあたる保健・医療・福祉の専門職との連携から、多職種の職能や存在意義を再認識しました。より深く考えるようになったのは、現場へ行くことの重要性。そして、チーム医療・地域医療の中での心理専門職の役割についてです。

震災の経験から、今も続けていることがあります。それは、地域住民と直接関わる方々に、心理専門職の発想を伝えること。自治体の職員や

本谷 亮さん

(心理科学部
臨床心理学科 1期生)

臨床心理学科准教授。本学大学院在籍時から病院や区役所の非常勤心理士として活動。2010年からは福島県立医科大学で教育・研究活動に加え、東日本大震災の被災者支援などにも従事。臨床心理学科同窓会では2006年から会長、2017年から顧問を務める。



医療専門職向けのセミナーなどに、積極的に協力しています。研究面でも、理学療法士向けのペインマネジメントプログラムを開発中。大学間の連携で、取り組みを進めています。いずれの活動にも、チーム医療・地域医療に、心理的アプローチをもっと役立てたいという思いがあります。そして、自分自身も病院、保健所、自治体、企業など臨床活動の領域を広げ、チーム医療・地域医療に携わってきました。

学生に、現場での経験を。

被災者支援が落ち着きはじめた2016年、母校に戻りました。自分の経験をもとに、チーム医療・地域医療で活躍できる心理専門職を育てたい。そんな思いで、日々学生と向き合っています。

とくに意識しているのは、学生が多くの現場で経験を積めるよう、環境を整えること。私の臨床現場でも、大学院生を同席・見学させています。たとえば、市立札幌病院の腎臓移植外科では、生体腎移植を受ける患者さんと臓器を提供する方のメンタルヘルスチェックを実施。医師・看護師へのフィードバックも行います。また、本学の心理臨床・発達支援センターでは、地域住民の方々のカウンセリングを担当しています。現場で見たこと、考えたこと。それは、必ず将来の糧になります。

また、2018年度からは公認心理師の養成がはじまりました。それに伴い、医療機関などでの実習も必修化されましたが、学科設立当時から臨地実習を行っているのが本学の強み。私は実習担当教員として、その特色をさらに大きくしていけるよう、実習教育の拡充にも取り組んでいます。かつて私も、さまざまな学びの場で多くのことを学びました。そんな環境を提供してくれた、先生方や実習先の職員の方々のありがたさを感じています。

医療大をめぐるご縁は、一生ものです。福島にいる間も、同窓会の活動を通して交流は続きました。その中のひとりが、本学科教員の金澤潤一郎准教授。1期生であり、坂野先生のゼミ仲間が同僚です。実は、私の妻も医療大の卒業生。そして、恩師・坂野先生には、今もご指導をいただいています。私の原点であり、いつも支えとなってくれた医療大。これからも、恩返しは続きます。